

(13)

氏名(生年月日)	岡 村 理 栄 子
本 籍	
学位の種類	医学博士
学位授与の番号	乙第827号
学位授与の日付	昭和62年6月19日
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当(博士の学位論文提出者)
学位論文題目	X線コンピュータ断層撮影による腫瘍型皮膚血管腫の研究
論文審査委員	(主査)教授 肥田野 信 (副査)教授 重田 帝子, 教授 阿部 和枝

論 文 内 容 の 要 旨

目的

皮膚における腫瘍型の血管腫として代表的なものには、莓状血管腫と海綿状血管腫とがあるが、両者は経過も異なり、治療法も根本的に相違するのでその鑑別は重要である。莓状血管腫の典型例は診断が容易であるが、皮下型、混合型では海綿状血管腫を含めた腫瘍型血管腫との鑑別が時として困難である。そこで、これらの腫瘍型血管腫にX線コンピュータ断層撮影(CT)を施行し、その所見を手術所見・組織所見と対比してCTの有用性を検討した。

対象及び方法

過去5年間に東京女子医大皮膚科を受診した腫瘍型血管腫(莓状血管腫8例、海綿状血管腫6例、その他の型4例)計18例を対象とした。年齢は小児を主とするが各年齢層にわたっていた。CT装置としては日立CTW3、又は東芝CT60Aを使用し、enhancementにはウログラフィンを用いた。

結果

CT所見について莓状血管腫は皮下のみに局限していたものが3例、皮膚・皮下にわたって存在したものが5例であり、境界の明らかなものが5例、表面分葉状のものが5例であった。腫瘤内が顆粒状または点状と不均一に撮影されたものが7例あった。そのうちの1例は生後6カ月時には、境界が明らかな非分葉状で腫瘤内は不均一顆粒状を呈していたものが、3年後の再検査時には腫瘤は縮少し境界不鮮明な分葉状を呈した。

海綿状血管腫は全てが皮下組織内にあり、境界が明

らかなものが5例、分葉状にみえたものはなく、1例を除き腫瘍内は均一に撮影された。

考察

自験例の組織学的所見とCT所見とを比較すると、境界の明瞭性は被膜の有無とは無関係で、内部に細胞成分が充実しているかどうかによるものようである。また、莓状血管腫は分葉状を呈したものが多いが、それは線維成分が隔壁のように発達してdensityの差を生じるためではないかと思われた。

enhancementによって全ての症例は著明に造影されたが、血管腫の種類によってenhancementの差は特に認められなかった。部位によっては(特に顔面ではdensityを比較する血管がなく)造影剤を使用しないと血管腫と断定するのは難しく、この意味でenhancementは不可欠といえる。

結論

CT検査は従来手術後にしかとらえることができなかった血管腫の断面像を*in vivo*で的確に観察できる。かつ、筋膜、筋肉、骨など下層組織との関係を明瞭に把握でき、造影剤注射によるenhancementで血管から構成されていることが確認でき、CT像の違いから鑑別診断も可能となる。治療方針の決定にも役立つ点CT検査は臨床上有用な方法と考えられた。

論文審査の要旨

本論文は皮膚に生ずる主要な結節型血管腫の X 線コンピュータ断層撮影像を, 肉眼所見, 手術所見, 組織学的所見と比較検討し, 本検査法が臨床上有用であることを示したもので, 臨床医学上価値あるものと認める.

主論文公表誌

X 線コンピュータ断層撮影による腫瘤型皮膚血管腫の研究

東京女子医科大学雑誌 第57巻 第2号
106~117頁 (昭和62年2月25日発行)

副論文公表誌

1) Café au lait 斑

皮膚病診療 4 (8) 719~722 (1982)

2) 東京女子医大皮膚科 最近10年間における STD の統計

皮膚科の臨床 26 (2) 147~157 (1984)

3) 胃癌手術後に発症した Pyostomatitis Vegetans

皮膚科の臨床 27 (12) 1301~1304 (1985)

4) Sex partner に尖圭コンジローマのみられた Bowenoid papulosis

STD 66 (1,2) 19~21 (1985)